

とらの恩返し おんがえ

むかし、ある山の中に、若者わかものと年とつた母親がふたりで暮くらしていました。

ある日のこと、若者がいつものように山で木を切っていると、どこからか苦しそうなさげびごえが聞こえてきました。声をたよりに行ってみると、大きなとらが、口を大きく開けたまま苦しうなっていました。そばへ寄よっておそるおそる口の中をのぞいてみると、のどにかんざしがささっていました。若者は、

（こいつ、女の人を食ったんだな）と思いました。かわいそうなのでかんざしを抜ぬいてやりました。とらは、何度もおじぎをして山のおくへ帰っていきました。

それからというもの、とらは毎日、山の木をひっこぬいては、若者の家の庭に投げこむようになりました。おかげで、若者は苦く勞ろうして山で木を切らなくても暮らしていけるようになりました。

ある日のこと、とらが、美しい娘むすめを若者の家に投げこんでいきました。娘が氣うを失しっていたので、若者と母親はおもゆを飲かませて介抱かいほうしました。娘は都の大臣だいじんの娘でした。

娘は、

「あしたはわたしの結婚けつこん式しきなのです。髪かみを洗あらってたくしていましたら、とらが飛びこんできてここへさらってきたのです」といいました。若者は、とらが自分のために花嫁はなよめをつれてきたのだと知りました。

やがて、若者と娘は夫婦ふうふになりました。

ふたりは、都の娘の家にいさつにいくことにしました。けれども、山の中にはお土産みやげに持つていくものが何もありません。とらはそれを知って、結婚式やお祭りのある家にかたつばしから飛びこんでいって、たくさんのお餅もちやお菓子かし、ごちそうを持つて帰ってきました。牛や馬までぬすんできました。若者は、牛や馬にたくさんの贈おくり物をつんで都に向かいました。

大臣は、死んだと思っていた娘が帰ってきたのでおおよろこびでふたりを迎むかえました。若者は、年とつた母親を都に呼よび寄せていっしょに暮らしました。

何年かたつたあるとき、都に大きなとらが現れて人や牛を食こい殺ころし、大騒おおさわぎになりました。王わさまは、弓や鉄砲てつぱうの名人たちを集めて、とらを退治たいじさせようとしたが、とらは駆かけまわって、弓も鉄砲もどうしても当たりません。そこで王わさまは、こんなおふ

れを出しました。

とらを退治した者には、千金あたを与え、大臣に取りたてよう

その晩ばん、とらが若者の家にやって来ていいました。

「わたしはもう死ぬ年になりました。どうせ死ぬなら、あなたにてがらを立てさせてあげましょう。あした、私が都へ出て暴れますから、あなたはどんな鉄砲でもかまわない、私を撃うってください。ねらいなど定めなくて、かつてにぶっ放してくれればよろしい。わたしはきつと倒たおれて死にます」

つぎの日、若者は、

「わたしがとらをしとめましょう」と、王さまに願ねがい出ました。

まもなく、とらが町に現れて暴れました。若者は出て行って、ろくろくねらいも定めず鉄砲をぶっ放しました。玉はみごとに当たってとらは倒れました。

若者は、大臣に取り立てられ、千金のほうびをもらって、いつまでも幸しあわせに暮らしたということなのです。

村上郁再話

資料『朝鮮民譚集』孫晋泰著 勉誠出版刊

